

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

荻谷剛彦 著

『イギリスの大学・ニッポンの大学』

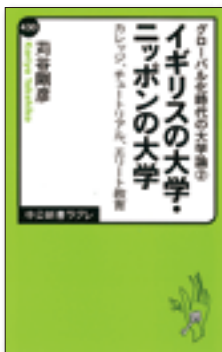
(2012年 中公新書ラクレ)

海外の教職経験から得た体験談

安価な値段で大量の顧客を乗せる航空機が導入され、気軽に海外へ出かけられる時代が到来したのは1970年代からだ。その結果、東京・ニューヨーク、あるいはロンドン間の航空運賃が劇的に低下した。利用者は初めは1週間程度の団体旅行が中心で、それに比較的長期の留学者が付け加わる程度だった。長期留学者といっても、いずれ日本に帰ることを前提にした、1、2年の短期留学が主流だった。あまり長期に海外に行っていると、帰ってきた時、下手をするとポストがなくなっているといった「キャンパス伝説」が、その当時はまだはびこっていた。大学の内部で確実なキャリアを築くとすれば、おとなしくコツコツ日本の大学院で学び、それなりの業績をあげ、日本の学界での評価を獲得することが常道とされていた。海外留学はむしろ邪道と見る目さえあった。

ところが1980年代に入ると、海外の大学院で博士号を取り、そのままその大学でポストを獲得し、教員として残るケースが少しずつ出始めた。つまり頭脳流出のケースが目立ってきた。荻谷氏はその初期のケースだった。1988年にアメリカのノースウェスタン大学で博士号を取得し、そこで助教授を務めた。アメリカの助教授は日本とは違い、自動的に教授に昇進できるポストではない。教授に昇進するには、いったん外部に出て、実績を作る必要がある。荻谷氏はいったん日本に戻り、東京大学の助教授、教授を務めた。

しかしその業績がやがてアメリカの学界で認められ、その評価は大西洋を越え、イギリスにまで伝えられた。学生の国籍が多様化したヨーロッパの大学では、教員の多国籍化に対する需要が高い。こうして多くの国で現在では教員・学生を含めた多国籍化、グローバル化が日常的なこととなっている。その結果、荻谷氏はアメリカ、日本、イギリスの3カ国にわたって教職を経験す



ることとなった。このキャリアをもとに日本の大学を見た時、何がどう見えてくるか、その体験談を語ったのが、『アメリカの大学・ニッポンの大学』(1992年玉川大学出版部→2012年中公新書ラクレ)であり、そして今回の本書である。イギリスの大学といっても、伝統あるオックスフォード大学である。そこで教えていると、どのようなことを発見するか、日本の大学との違いは何か、具体的な事例を紹介している。

根底にある教員の相互理解

大教室に何百人の学生を詰め込み、マイク片手で教えるのとは違って、教員と学生とが一对一の関係で、論文の読み方、書き方、その中身の評価の仕方を学ぶ形式が中心的な教え方になっている。個々の教員が各自、自分で試験問題を作り、自分で作った基準で可否を決めてゆくのではない。イギリスでは場合によっては、自分がまったく教えていない内容について採点することもある。なぜそれが可能なのか。それは大学では最低限これだけのことは学んでおくべきだという、教員相互の共通理解があるからである。

問われるのは改革の質

今回のレポートは、オックスフォード着任後、5年経った時点での中間報告である。オックスフォードに住みつき、イギリス社会とそこでの学問の在り方を、さまざまな同僚、学生と接触しながら獲得して書かれた貴重な体験報告である。滞在期間が長くなればなるほど、経験の質も変化し、荻谷氏のイギリスの見方、日本を見る目も変化してくることもあるだろう。これからも定点観測を続け、日本の大学のどこを変えたほうがよいのか、いいヒントが発信されてくることだろう。現在の日本では、もっぱら「大学改革」が叫ばれながら、実際に「箱もの」の補修・修繕にのみ目が行き、「中身」が視野から外れている。外側を変えれば、中身も変わると思うのは、間違いである。